

現代生き甲斐に関する社会学的考察

岡田直之

I 現代生き甲斐論の時代背景

いうまでもなく、生き甲斐の問題は古くして新しい主題である。「人間はいかに生くべきか」ということはまさに洋の東西を問わず、時代の古今を通じて哲学の中心テーマであった。しかし、同時に、それぞれの時代の生き甲斐論には、それぞれの時代の刻印が打たれていることも忘れてはならない。折しも、「幸せて何だっけ、何だっけ」というCMソングがはやっている。生き甲斐のテーマ・ソングがしきりにうたわれているとすれば、それはいったい、どんな「時代の顔」を映し出しているのであろうか。

ある研究者が調べたところによると、「生き甲斐」という題名のついた書物が目につき始めたのはおよそ1970年前後¹⁾ということである。1969年には、『生きがいのあかし』『生きがいのある社会』『生きがいの認識と探求』『生きがいを作る』の4冊を数えたが、1970年には、「生きがい」とか「生きる」といった言葉を題名に含む書物は十指を超えたという。時あたかも、『朝日新聞』1971年元旦号の天声人語は、こう述べている。「生きがい論がはやっている。幸福とはなにか。しあわせの指標はなんだろう。いったい何が真の豊かさなのか。ひもじかった戦後の何年間かが『胃袋の時代』だったとすると、その後『経済成長の時代』をへて、いま『心の時代』にさしかかったのではないかと思う。／経済成長だけでは幸福にはなれない、ということに私たちは気がついた。一斉に、生活実感としてそれを悟った。じつに大変な発見で、この発見の意味深さは、まだ十分に知られていない。つきつめていくと、これを境に文明の歴史が

変るだろう、という思想家もあった」。²⁾

『朝日新聞』は同年に、「心」と題する年間企画テーマを組み、「心の時代」にさまざまな角度からアプローチし、³⁾『毎日新聞』も同じ年に、「幸福」と題する企画記事を連載し始めている。その連載特集を始めた狙いについて、『毎日新聞』は第1回の記事で、つぎのように記している。「あなたはいま、自分が幸福なのか、わけがわからなくなっているのではないか？（中略）幸福だと思っていたことが実は不幸のタネだったり、不幸だと思ってつま取ってしまったものの中に、実は幸福の実がひそんでいたことに気づいたりして、右往左往している」。⁴⁾

政権党たる自由民主党はこうした時代の気分や世相に感応して、1971年度運動方針の中で、つぎのように主張していることも留意してよいだろう。「『福祉なくして成長なし』、国民一人ひとりに生きがいを与え、幸福にする、明るく健康な福祉国家を実現することである。70年代のわが党の政策は、国民各層における新しい生きがいの探求に解答を与え、具体的プログラムを提示して、均衡のとれた社会生活を享受できるような施策を行なうことである」。⁵⁾

1970年前後といえば、高度経済成長路線の成果として、人びとは一面において物質的経済的な豊かさを享受しながらも、物質的経済的豊かさだけでは内面的充実を味わえないことについて反省を迫られた時期でもあった。1970年代に入って深刻化する公害や環境破壊と、1973年の第一次石油ショックによる高度成長の破綻とがとりわけ「真の豊かさとは何か」という問いかけに拍車をかけたといつてよい。

このように、生き甲斐の問題をクローズアップさせた時代背景として、第1に、高度経済成長路線を支えた物質主義的価値観への疑念や見詰め直しといった底流があったことにまず着目すべきであろう。物質的な豊かさがかえって精神的な貧しさを浮かび上がらせ、逆照射したところに、生き甲斐論の台頭をうながした今日的背景のひとつの特徴があると思われる。

高度産業社会では、人びとの価値観の転換が一般に生起する、と考えられている。たとえば、アメリカの政治学者R・イングルハートによると、欧米先進

国の場合、1970年代に入って物質主義的価値観よりも「生活の質」や自己実現を重視する非物質的ないし脱物質的価値観への目立たぬけれども根本的な変化が生じていることを、世論調査データに基づき検証し、その変化を「静かなる革命」と名づけている⁶⁾。1970年代における価値観の転換ないし変容は日本だけでなく、世界の先進国にほぼ共通した今日的現象であるといつてよからう。

このことは一見、「人はパンのみにて生きるものにあらず」という普遍的真理の再認識にすぎないといえるかもしれない。しかし、いくらジャーナリスティックな言い方をすれば、飢餓社会よりも暖衣飽食社会のほうがはるかに生き甲斐を見いだしにくいという逆説を、現代人が痛切に経験しつつある点で、現代社会における生き甲斐の問題はまさしく現代文明の在り方そのものを問い直すかたちで浮上してきていることを正当に認識すべきであろう。

第2に、現代人の生き甲斐を困難ならしめている条件として、現代社会における価値観の相対化を挙げなければならない。「不確実性の時代」とか「海図なき航海」といった言葉の流行は取りも直さず不変的なもの、絶対的なものの価値体系の崩壊を意味しているといえよう。伝統的な生き甲斐が多くの場合、善悪正邪やイデオロギー、国家や教会などといった絶対的価値基準への帰依を通して、よりよく生みだされるものであったとするならば、絶対的価値や絶対的信念の崩壊は同時に生き甲斐の崩壊でもあったということになるだろう。豊かな社会において生き甲斐を見いだすことが一層むずかしいのと同様に、価値観の相対化する現代社会において生きる拠りどころを探しだすことは、価値観の選択的多様性のゆえに、人びとにとってなかなかの重荷にならざるをえないとも考えられる。

第3に、現代社会が巨大化し、複雑化し、官僚制化するにつれて、現代人は自己の運命さえみずからコントロールするちからを失い、いわゆる疎外された状態に陥るために、生き甲斐の喪失をよぎなくされるという見方がある。たとえ個人が生き甲斐を求めて死にもの狂いの努力をしても、現代社会の息苦しい管理機構の岩盤はまことに強固であって、その管理システムに適合しない欲望や要求を抑え込み、その結果生じる挫折感の集積が現代人の生き甲斐を去勢し

てしまうというわけである。管理社会論とか人間疎外論といった鹿爪らしい論議はさておくとしても、人びとが現代社会において個性的で主体的な生き方を貫こうとすると、どんなに多くの障害や抵抗と果敢に闘わなければならないかについては、だれしも多かれ少なかれ日常的に経験済みのことがらであるに相違ない。

生き甲斐の喪失とは、別の視点から捉えると、自我の喪失やアイデンティティの喪失ともかかわっている。自分がいったい何者であるのかが明白に自己認識できなければ、確かな自己存在感をもつことは到底不可能であるからだ。自我やアイデンティティの喪失を慢性的に生じやすい現代社会において生き甲斐を探し求め発見することは、ギリシャ神話のシスュフォスのように山頂へ大石を転がし上げるのに似たむなししい企てなのかもしれない。作家らしい鋭い嗅覚で、生き甲斐を発見しにくい現代人の絶望の深さを、つぎのようにどぎつく語る中野孝次のデモニッシュな叫びに、われわれは一瞬たじろぎながらも真摯に耳を傾けなければならないだろう。「ぼくはときどき夢想する。この現代社会に自分を強烈に印象づけ、自分という爪跡をのこすには、犯罪しかないのじゃないか、と」⁷⁾

第4に、近年における医療技術の高度な発達、とりわけ延命医療の進歩が人間の生と死との境を曖昧化して、新たな死生観の構築をわれわれに迫っていることも見落としてはならないと思う。遺伝子組み換え、植物人間、尊厳死、脳死、臓器移植など、バイオエシックス（生命倫理）にかかわるすぐれて現代的な諸問題を新たに突きつけられて、人間とはそもそも何か、人間が生きるとはどういうことかといった根源的問題を、その原点に立ち返って改めて考えさせる契機になったのである。

第5に、高齢化社会の到来と符節を合わせて、生き甲斐論が活発になったことに着眼すべきだ。このことはなにも、老人の生き甲斐がにわかには社会問題化したという現象面だけをいっているわけではない。もっと重要なのは、老人の生き甲斐を論議することを通して、生き甲斐が実は「死に甲斐」と背中合わせになっており、生と死を切り離すのではなく、死を取り込んで人生の在り方を考察する必要性を、いささかのてらいもなく認識できるようになったことであ

ろう。だれにでもかならず訪れる「死」を直視し、素直に意識し始めるときに、人びとはみずからの生き甲斐について思いをめぐらし、真剣に生き始めるということにほかならない。

乳がんと闘いながら死の直前まで活発な執筆活動を続けたフリージャーナリスト千葉敦子の逝去が昨年7月マスコミで大々的に報道され、多くの人びとに大きな悲しみと深い感動を与えた。⁸⁾『朝日ジャーナル』誌上に『「死への準備」日記』を連載中であったが、「ときには、千葉さんが病気だということを忘れて読んでいた」と作家なだいなだをいわせしめたほど、乾いた目をもったジャーナリストであった。千葉の生前の最後の著書の題名は『よく死ぬことは、よく生きることだ』となっている。この書物の巻頭を飾っているのが大きな反響を呼んだ上智大学における講義を再収録したもので、日本では「死への準備教育」(death education)がたいへん遅れていることを指摘した上で、「死について考えたことがない、というのは、生きることについて真剣に考えたことがない、というのと同じです」と述べ、「よく死ぬ」とことと「よく生きる」とことは表裏一体の関係であることを明言している。⁹⁾このように、死は決して生の対極にあるのではなく、「人皆生を楽しまざるは、死を恐れざるが故なり」という逆説に思いを致さなければならない。

死について考察することはたしかに気の重い作業であるし、軽々に手を下ろせない主題であるに違いない。そして、その重さのゆえに、ともすると、生の世界から死を隔離したり、やみくもに排除したり、とかくタブー視したりするようになって、その結果かえって「死の美学」への危険な跳躍を誘発する恐れもある。しかし、生と死に関する弁証法的関連を視野に収めない生き甲斐論は決して真っ当なものではないし、生き甲斐を深さに向けて穿つことはできないだろう。井上俊が述べたように、「生の全体から死が完全に欠落してしまうと、生そのものが平板化し、貧困化するという問題も生じてくる。死という限定要因¹⁰⁾を失った生、それを欠落させた生は、往々にしてその輝きを失いがちである」。死を背景に負うた生の輝きがそこにあることに気づかなければならない。

生き甲斐論をこんにち活性化させている時代背景や問題状況はもとより以上の諸点で尽きるわけではないけれども、ひとまず、このように集約した上で、

つぎに生き甲斐の概念を検討し、さらに現代日本の生き甲斐の実態と動向に分け入って、われわれがいま置かれている生き甲斐のリアリティを具体的に点検し、そのはらんでいる意味を考察してみよう。

II 生き甲斐の概念的検討

生き甲斐という言葉は日本語独特のものといわれている。「生きがいということばはいかにも日本語らしいあいまいさと、それゆえの余韻とふくらみ」があって、「日本人の心理の非合理性、直感性をよくあらわしているとともに、人間の感じる生きがいというものの、ひとくちにはいい切れない複雑なニュアンスを、かえってよく表現しているのかも知れない」と、神谷美恵子は述べている。¹¹⁾

わが国で生き甲斐の項目を最初に採り上げた社会学辞典は、恐らく、濱島朗ほか編『社会学小辞典』（1977年）であったと思われる。ちなみに、生き甲斐はつぎのように説明されている。「人は、日常の仕事や生活のなかで、自己の存在や活動の意義・価値を問い求め、生き働き続けることの意味を確認・再発見せずにはいられない。このような生活における『はりあい』の意識をいう。つまり生活に統括的目標を設定することによって、生活行為体系の主体的福祉を増進させる意識形態である。その基本特性は、1) 生活目標達成への努力過程で生まれる（過程性）、2) 実利を伴わなくてもよい即自的関心事（表出性）、3) 生活行為の対象自体（母親にとっての幼子など）に転化する（主体客体の融合性）、4) 目標達成が困難なほど生きがい感が大きい（価値性）、5) 社会的欲求の平常的充足の場（職場・家庭など）で抱かれる（日常性）、などである」¹²⁾。

このように多面的に発光する生き甲斐について、「日本語らしい余韻とふくらみ」を取りこなし生き甲斐を定義づけようとしても、なかなか容易ではない。かてて加えて、生き甲斐の内実そのものが時代とともに変化し（歴史的規定性）、社会や文化によって異なること（文化的規定性）にも留意しなければならない。神谷美恵子は生き甲斐という言葉に、ふた通りの使い方があることを指摘している。すなわち、「この子は私の生きがいです、などという場合のよ

うな生きがいの源泉、または対象となるものを指すときと、生きがいを感じている精神状態を意味するとき」である。¹³⁾この神谷の考えを引き継ぎながら、生き甲斐の概念を構成する操作的の基本要素として、(1)生き甲斐観、(2)生き甲斐の拠りどころ、(3)生き甲斐感を挙げるができると思う。生き甲斐観とは、生きることの目的、価値、意義を問い、望ましい生き方に関する価値理念を中核に成り立ち、一般に、人生観と呼ばれるものに対応するといつてよい。生き甲斐観は人びとが個人的な経験や知恵に基づいて作り上げる即自的なものと、哲学者、思想家、宗教家などによって理論化、体系化されたものに大別できるだろうが、人びとの現実の生き甲斐観は多くの場合、即自的なものと哲学的なものとの混合形態をとるとされる。

生き甲斐の拠りどころは生き甲斐の対象であり拠点であるが、生き甲斐観を具体的に、あるいは象徴的に表現する指標でもある。きわめて具体的日常的なものから抽象的観念的なものにまで広がるとともに、生き甲斐の対象へのコミットメントも、部分的相対的なものから全面的絶対的なものまでさまざまである。多岐にわたる生き甲斐の拠りどころについて、(イ)お金などのモノ、(ロ)子供などのヒト、(ハ)国家や企業などの組織・団体、(ニ)自由や愛などの精神的観念的なもの、(ホ)布教や仕事への献身などの実践的なものといった分類が考えられる。これはあくまでも分析上の分類であって、現実には、いくつかの拠りどころが重層的複合的に結び合わさって生き甲斐の拠りどころになる場合が多いだろう。

生き甲斐感は生きる喜びや生きる張り合いを内発的に感じ入ることであり、生きることの自己充実感にほかならない。したがって、生き甲斐感はずぐれて個人的主観的な感情であって、内面からほとぼり出る点で、いわゆる言い難い充実感である。恐らく、真に自分らしい人間的な生き方がなんらかの程度において実現されているときに、人びとは生き甲斐を肌身で感じとることができる。それは強烈で刹那的な、いわゆる絶頂経験であるよりも、もっと静謐で持続性のある充溢した高原経験として生起すると思われる。

生き甲斐感はなによりも現在における自己充実感として特徴づけられる。しかし、一方で、過去における衝撃的な生き甲斐感が現在まで残存し持続する場

合もあり、他方では、将来における生き甲斐への期待感が現在の生活に張り合いを与え、生き甲斐感を感じさせることもある。前者を過去志向型生き甲斐感、後者を未来期待型生き甲斐感と呼ぶことができる。

生き甲斐を構成する3つの要素間の相互関係や構造的動態にも注目しなければならぬだろう。生き甲斐観、生き甲斐の拠りどころ、そして生き甲斐感のいずれが中核的位置を占め主導的役割を担うかによって、人びとの生き甲斐の有り様が異なってくるであろうし、3つの要素が相乗的に作用し合って生き甲斐の質を高め、いわば黄金の正三角形を作り上げるようなメカニズムの究明も今後の重要な課題となるだろう。

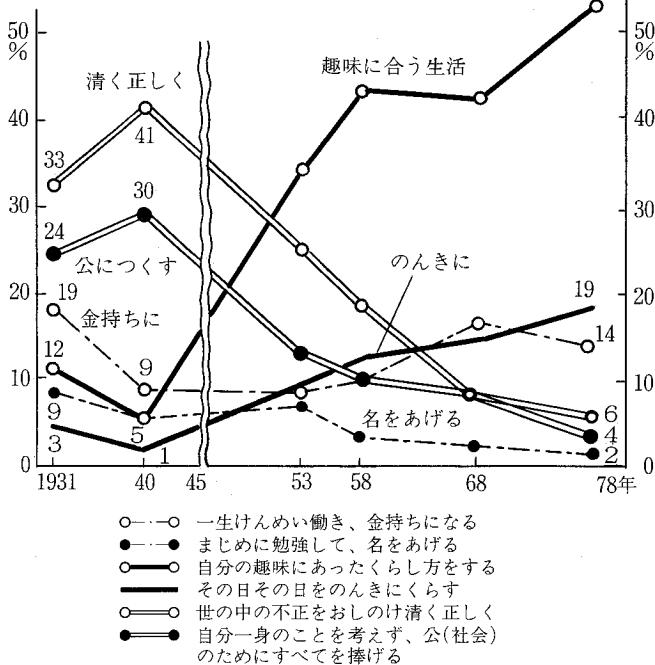
III 現代日本人の生き甲斐に関する調査データの分析

日本人の生き甲斐に関連する調査項目を含む社会調査は恐らくかなりの数にのぼると思われるが、生き甲斐に関する本格的かつ先駆的な実証研究としては、主として1960年代に実施された生き甲斐に関する主要な調査データを組織的に分析した見田宗介の業績がある¹⁴⁾。そして、すでに言及したように、1970年代に入って、生き甲斐の問題への関心の一層の高まりを機敏に反映して、生き甲斐に照準を合わせた社会意識調査が盛んになる。たとえば、『朝日新聞』が1971年1月1日付朝刊で掲載している「全国生活意識世論調査」の中心テーマは日本人の生き方であったし、『毎日新聞』も1971年1月3日付朝刊で、「人間再発見—生きがいをさぐる」という見出しのもとに、生き甲斐をテーマにした全国世論調査の結果を掲載している。さらに、NHK放送世論調査所が1972年10月に「現代の生きがいに関する世論調査」を実施し、その調査目的を「1960年代の高度成長がもたらした物質的繁栄の中で、人びとがどのような欲求をもち、何に生きがいを見出しているのかを明らかにする」と記している¹⁵⁾。既存の基礎的調査データから、現代日本人の生き甲斐について、どんな実態が明るみに出るであろうか。

まず、戦前期と比べて、日本人の生き甲斐観がいかに様変わりしたかについては、図1をみれば明瞭である。戦前期の資料は成年男子を対象に徴兵検査の

ときに実施した調査の結果で、戦後における科学的な調査データのような妥当性と信頼性をかならずしももつわけではないけれども、現存する貴重なデータとしてしばしば引用されている。改めて指摘するまでもなく、戦前の日本社会では、天皇制国家主義のイデオロギーから流出する精神主義的生き方や滅私奉

図1 人生観：戦前と戦後の変化（20歳前後の男子）



(出所) 見田宗介『現代の生きがい—変わる日本人の人生観』日本経済新聞社、1970年、38頁。

注1) 1978年調査の結果については、林知己夫『日本人研究三十年』至誠堂、1981年、76頁によって補充した。

2) 戦前調査の調査対象者は20歳の男子、戦後の調査資料はいずれも文部省統計数理研究所の実施した「日本人の国民性調査」(全国調査)に基づいて、「男性20—24歳」の調査結果を記載している。

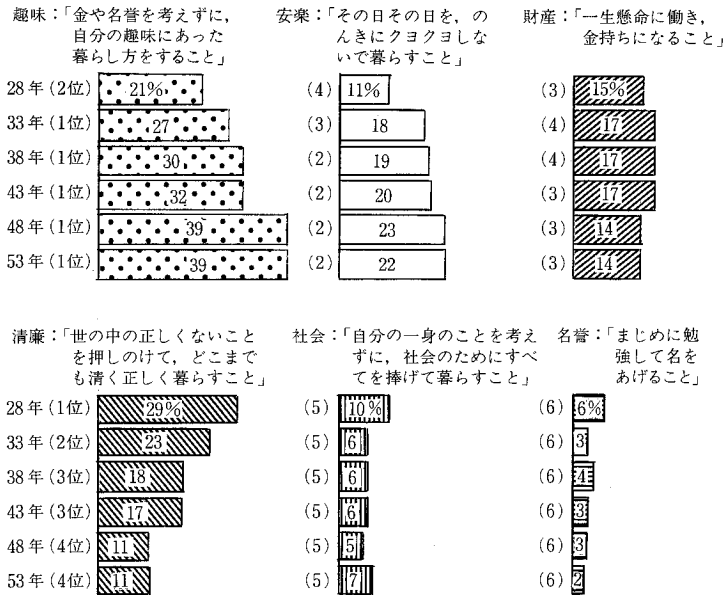
3) 林の前掲書では、最初の調査年は1931年ではなく、1930年になっている。また、日高六郎『戦後思想を考える』岩波書店、1980年(79頁)でも1930年調査となっている。

4) 林の前掲書に基づき、一部、数値を記入した。

公型人生観が日本人の典型的生き甲斐観であった。しかし、敗戦を境にして、日本人の生き方はまさにコペルニクスの転回をみせ、個人主義を基調とする私生活重視の方向に転調し、この傾向は高度経済成長を経て一層加速され定着してきている。

図1の戦後期の調査データは戦前期と比較できるように20歳代前半の男性の比率を示しているけれども、日本人全体の動向については、図2の通りである。私生活を重視し優先させる生き方が一本調子で着実に増え、他方、戦前型人生観の落ち込みはきわめて大きいことを浮き彫りにしている。私生活重視・優先型の人生観こそ、もっとも顕著な不可逆の趨勢であり、現代日本人の生き

図2 自分の気持ちに近い暮らし方



(出所) NHK放送世論調査所編『図説 戦後世論史第二版』日本放送出版協会、1982年、25頁。

注1) 調査年はいずれも元号(昭和)である。

2) いずれも文部省統計数理研究所の実施した「日本人の国民性調査」であって、有権者を調査対象とした全国調査。

方の基調である。戦後、とりわけ高度経済成長期において高進した日本人の人生観のドラスチックな変容は「私生活主義」「プライベートイゼーション(私生活化)」「『滅私奉公』から『滅公奉私』へ」などといったように、さまざまな用語や概念で捉えられている。¹⁶⁾ それぞれの概念的焦点が微妙に異なっているけれども、巨視的認識において重なり合い、収斂しているといつてよい。

この私生活重視・優先型の人生観を少し別の見地からみると、表1にうかがわれるように、上段に構え肩ひじ張った生き方よりも、ごく日常的な生活意識に密着した堅実で地味な生き方といえるし、あるいは表2にみられるように、「健康で円満な家庭」という日常卑近なものへの強烈な共感にほかならない。したがって、私生活重視・優先型の生き方は一面では日常の暮らしにしっかり根を下ろしたしぶとい粘着力のある民衆思想として、国家権力からの一定の自立性や現状への即自的局部的批判性をはらむと考えられるし、他面では、小市民的で底の浅い片隅の幸せを追求する生き方であるという批判も浴びせられ、そうした批判的ニュアンスを込めて、マイホーム主義の言葉も用いられたりする。また、私生活重視・優先型の生き方はとかく私的生活欲求の充足に傾斜するために、体制的消費文化に足をすくわれやすい弱みをもつことにも留意すべきであろう。さらに、「私生活主義の生活倫理は、わがくにの内外におよぶ帝国主義とファシズムの再生してゆく動向のなかで、おのれの内実をまさに熟慮すべきときである」(傍点原文)¹⁷⁾ といった重苦しいラディカルな批判がある。いずれにしても、私生活重視・優先型の生き方ははらむ明と暗、強みと弱み、正と負といった両義性の織りなす葛藤や矛盾を的確に見定め、総体的に判断しなければならぬ。

私生活重視・優先型の生き方に関する総体的判断ということでいえば、「『滅私奉公』が国をほろぼした以上、その反対の『滅公奉私』こそ国民に未来をもたらしてくれると考えるものは、よほどの楽道家である。『滅私奉公』の反人間性にはじまり、『滅公奉私』の没人間性にいたる。『滅公奉私』の極限状態には、大きな危険と困難がまちうけていると思う」という日高六郎の見解に同感するし、¹⁸⁾ 「さいきん一部の風潮となっている『滅公奉私』現象は、一見したところ自分の『私』だけは大切にしているように見えるが、けっきょくは自分の首を

表1 生きがいの対象

人びとは何にいちばん生きがいを感じて、毎日の生活を送っているのだろうか。結果は次のとおりである。

毎日の生活そのもの	26%
子どもや孫の成長	18
家庭	13
仕事や勉強	10
趣味やスポーツ、旅行などの楽しみ	9
自分を向上させること	8
友人や知人とのつき合い	8
信仰	3
世の中のために尽くす活動	3

(出所) 「現代の生きがいに関する世論調査—結果の概要」NHK放送世論調査所、1972年、14頁。

注) 15歳以上の全国民を調査対象として、1972年10月に実施した世論調査。

表2 共感する生き方

あなたは、どんな生き方に共感を持ちますか。

金をためることが第一	4%
出世を第一目標に努力	1
自由に人生を楽しむ	14
仕事一筋に生きる	4
世の中に背を向けても自分なりに生きる	2
世の中のために努力する	7
子どもの成長に生きがい	12
健康で円満な家庭を作る	53
その他の答え	2
答えない	1

(出所) 「全国生活意識世論調査」『朝日新聞』1971年1月1日付朝刊。

注) 1970年11月に実施された有権者を調査対象とした全国世論調査。

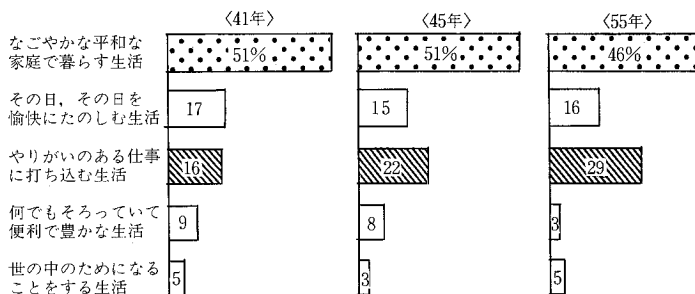
締めていることに気づいていない。『滅私奉公』と『滅公奉私』が同根の裏返しにすぎない」という山田洸の論評に耳を傾けるべきであろう。¹⁹⁾正しい意味における「公的なもの」を蒸発させ、あるいは欠落させて、ひたすら私生活を重視し優先させるならば、その生き方は一種の閉ざされたマイホーム・ナショナル

リズムにほかならず、その閉鎖性や排外性やエゴイズムに厳しい批判の目を向け、打ち破っていく必要がある。マイホームという狭い枠のなかに閉じこめるのではなく、私生活を社会全体との関連のなかに明確に位置づけ、その裾野を広げ、社会全体の幸せにつなぎ組み上げていくときに、私生活重視・優先型の生き方の弱点や盲点を乗り越えることができるであろう。

ところで、私生活重視・優先という主潮に根本的な変化はないものの、図3の示唆するように、将来の生き甲斐のモデルとして「やりがいのある仕事に打ち込む生活」を希望する人びとが1980年代に入って目立って増えてきていることに注目すべきだ。単に一時的な動きにすぎないのか、それとも日本人の生き甲斐観の構造変化につながる大きなうねりへの予兆なのか、注意深く見守る必要があるだろう。こうした変調の兆しは一面において「柔軟な個人主義の萌芽」であって、「目的指向と競争と硬直した信条の個人主義にたいする、より柔軟な美的な趣味と、開かれた自己表現の個人主義」への期待を抱かせるかもしれない。そして、「柔らかな個人主義」は私生活重視・優先型の生き方に、公的なもの²⁰⁾を縫い合わせる産婆の役割を果たすかもしれない。

これまで、生き甲斐観をもつばら私生活重視・優先という基軸でくくって統括的に論じてきたが、もちろん、生き甲斐観はもっと多面的で複雑な構造をもつ

図3 希望する生活



(出所) NHK放送世論調査所編『図説 戦後世論史第二版』日本放送出版協会、1982年、17頁。

注1) 調査年はいずれも元号(昭和)である。

2) いずれもNHK放送世論調査所の実施した全国世論調査で、調査対象は20-69歳の有権者である。

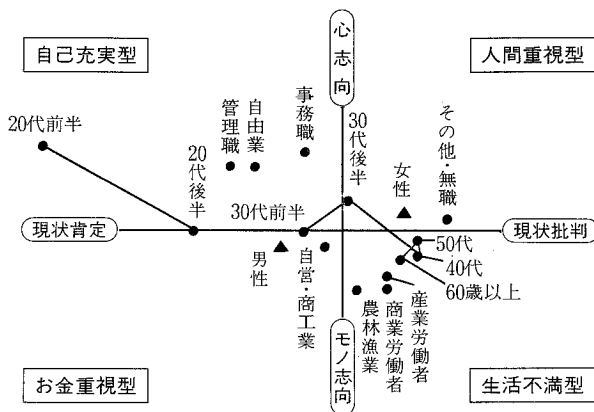
ている。ここでは、ひとつの例として、『朝日新聞』1985年1月3日付朝刊に掲載された多次元分析による日本人の生き方の基本類型を紹介してみたい。

『朝日新聞』の記事によると、人生観や世相観など関連性のある11の質問項目を統計的に処理した結果、「人間らしい生き方を重視する型」(33%)、「自己の向上をめざす型」(23%)、「生活に不満をもつ型」(16%)、「すべてはお金と割り切るお金重視型」(15%)、「その他」(13%)の5つのグループに分かれたという。図4は4つの基本類型の価値意識特性と社会的属性上の特徴とを表している。このグラフから分かるように、人間重視型は現代社会の現状に批判的であるとともに、もっと心豊かな生き方を求めるタイプの人びとであって、30歳代後半、女性に多い。自己充実型は人生の目標に「自己の向上」をかかげるものの、現状肯定的であって、その典型は20歳代前半の若者である。一方、生活不満型は中高年齢層や労働者・農民に多く、日常生活における不満が物質的志向への傾斜をもたらしていると考えられる。お金重視型は男性や自営・商工業者層に多く見られ、現状に肯定的であるとともに、心の豊かさよりも「物質面の充実」を重視する点で、1960年代の高度経済成長期の生き甲斐観をいまなお引きずっている人びとだといえるかもしれない。

人間重視型と自己充実型とで56%と全体の過半数を占め、人間らしい生き方への希求が現代日本人の生き甲斐観として大きな比重を占めている。ここで多少大胆な推論を行うならば、私生活重視・優先型として総括的に捉えてきた生き方を子細に点検すると、人間重視型と自己充実型とに細別できると考えられるかもしれない。先に言及した私生活重視・優先型の生き方の両義性も実は、こうした分型を想定することによってよりよく理解できるであろう。そして、社会の現状に批判的であるか、現状を肯定するかが、2つの分型を判別する重要な基準であることも、私生活重視・優先型の生き方のアキレス腱を打ち破っていく鍵がどこにあるかを示唆しているように思われる。

つぎに、現代日本人は、何を生き甲斐の拠りどころにしているのであろうか。図5及び表1から明らかなように、なによりも、「家庭」が生き甲斐の最大の拠りどころである。平均的日本人にとって、「家庭あつての生き甲斐」ということにほかならない。恐らく、「仕事」が第2の拠りどころと考えてよいだろう。趣

図4 「生き方」の多次元分析



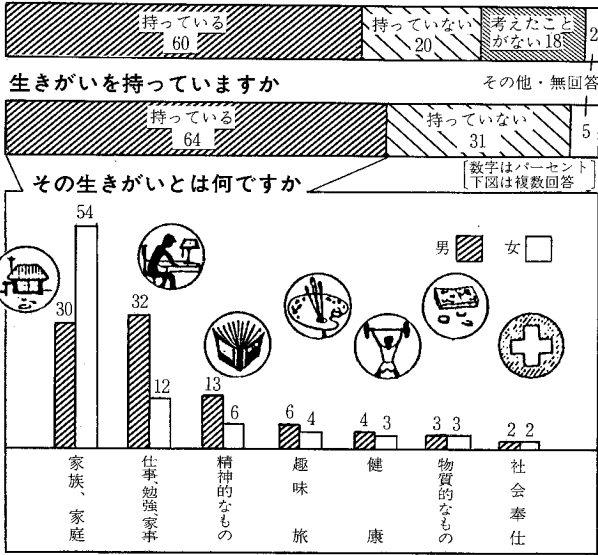
(出所) 「定期国民意識調査」『朝日新聞』1985年1月3日付朝刊。

注) 1984年12月に実施された有権者を調査対象とした全国世論調査。

味やレジャーも生き甲斐の重要な拠りどころとなっているものの、全体の比率からみると二次的なものといえよう。結論的にいえば、「家庭」と「仕事」が現代日本人の生き甲斐の二大拠点であるといってよいし、前節で説明した生き甲斐の拠りどころの分類に従っていえば、身近な人間関係と日常的具体的行為との占める割合が圧倒的に大きいということになる。このことはまことに平々凡々たる事実の再確認にすぎないように見えるかもしれないけれども、生き甲斐とは実はすぐれて日常の小さな人間的営みの積み重ねであることを物語っている。

こうした目を引く実態もさることながら、生き甲斐の対象が多様に分散している点も忘れてはならないと思う。戦前期の場合のように、特定のパターンへの一極集中化を生じていないことがむしろ現代日本人の生き甲斐を鮮烈に特徴づけていると考えられるからである。図5にみられるように、10人のうち1人ちかくが「精神的なもの」を生き甲斐としている事実、あるいは表1によれば、日本人の3%の人びとが「信仰」に生き、「世の中のために尽くす活動」に生き甲斐を感じている事実こそ、たとえ地をほうような比率とはいえ、もっと

図5 一生の目標を持っていますか



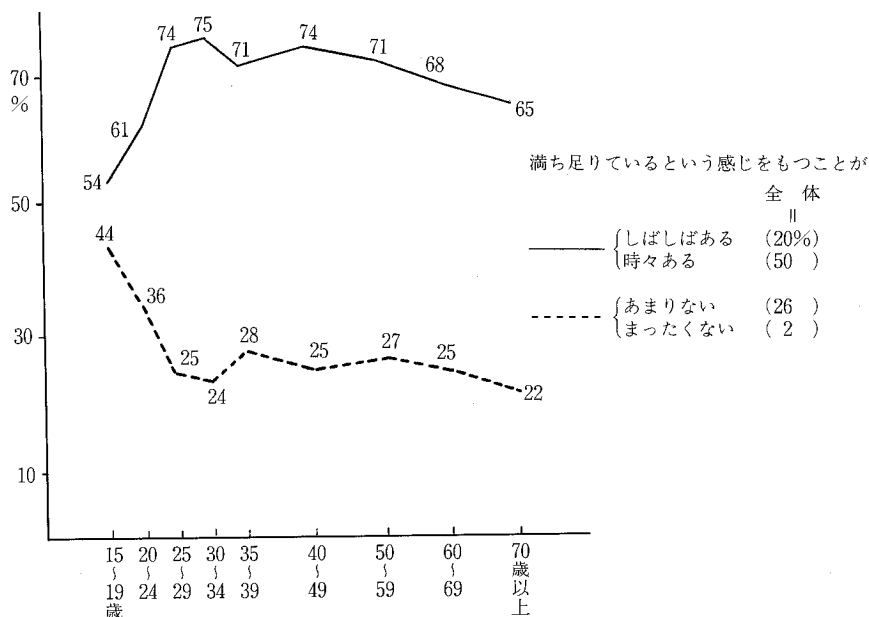
(出所) 「人間再発見生きがいをさぐる」『毎日新聞』1971年1月3日付朝刊。

(注) 1970年12月に実施された16歳以上の男女を調査対象とした全国世論調査。

噛み締めるべき重いデータを提供しているというべきだろう。生き甲斐のこの種の拠りどころはもっとも強力強烈で濃密な生き甲斐の源泉である場合が少なくないからである。人びとの生き甲斐の対象はもとよりひとつに限定されるわけではなく、複数の対象が結び合って生き甲斐の質を高めるけれども、既存の調査データに基づいて、こうした生き甲斐の対象の全体像に肉薄することはなかなか容易なことではない。とはいえ、「家庭」と「仕事」の2つの大車輪を両輪として、「レジャー」を小車輪とするような三輪車の構造を、現代日本人の生き甲斐の対象に関する標準的構図として描き出すことができるであろう。

最後に、生き甲斐感にかかわる生活の充実感に関する調査データをだいたい以前の古いものが挙げておくと、毎日の生活に満ち足りていると感じている人びとは日本人全体の7割で、満ち足りていないと感じている人びとは3割弱となっている(図6参照)²¹⁾。もっとも、この7割の人びとの内訳をみると、「しばしば感じる」20%、「ときどき感じる」50%となっており、日常生活の充実

図6 毎日の生活の充実感



(出所) 「現代の生きがいにに関する世論調査—結果の概要」NHK放送世論調査所、1972年、13頁。

(注) 15歳以上の全国民を調査対象として、1972年10月に実施した世論調査。

感は全般的に底が浅いといえよう。注目されるのが、10歳代後半から20歳代前半にかけての年齢層で、充実感の欠如が目立つことである。若者の「青い鳥症候群」を示唆するひとつのデータであるかもしれない。いずれにしても、生き甲斐感の実態を明るみに出すのに、いかにもデータ不足であるといわざるをえない。

生活の充実感が全体として底の浅いものだとすると、現代日本人の平均的生き甲斐といってよい「家庭の生き甲斐」と「仕事の生き甲斐」は現代日本の経済社会構造における疎外された疑似的な生き甲斐の影を宿しているのではないか、という疑念も湧いてくるかもしれない。すなわち、前者は生産・労働の場における極度の没人間的苦境にあえいでいる現状からの単なる避難所としての

働きを担い、後者は会社人間や企業戦士といった言葉に象徴されるように、仕事への盲目的献身や仕事の物神崇拜化から生じるまやかしの充実感にすぎないのではないかといった問題性である。

この点をめぐって、宮島喬のつぎのような問題提起に注目すべきだろう。すなわち、かれは、労働者の私生活志向を私生活享受型と私生活逃避型に分け、後者について「仕事における疎外感・挫折感、あるいは不満感のうちにあつて、ばあいによっては諦念も作用して、たぶんに逃避的に私生活志向に生きざるをえないライフスタイルの型」であると説明し、中下層労働者の私生活志向の影の部分に触れ、さらに「仕事=生きがい」観についても、「すくなくとも大勢としてみるかぎり『仕事=生きがい』観の形骸化はおおいえないのではないかと述べている。いうまでもなく、こうした一連の問題は調査データの解釈を超えた理論テーマとして究めるべきものであろう。

IV 結びにかえて

生き甲斐について論じることは、ちょうど飛び道具のブーメランのように、放たれた論議の矢はふたたびおのれ自身に戻ってくる。ひとりの人間として、生活者の目と言葉で生き甲斐の問題を捉え直し、見返すことを迫られざるをえない。人生観と人生論との概念的区別を踏まえるならば、多分に個人的な人生経験や感想に彩られる人生論的な平面に回帰し、なんらかの程度においておのれ自身を表白せざるをえないということでもある。これまでの考察の筋や論議の流れにまったく無関係ではないにしても、かならずしもとらわれることなく、生き甲斐を考える上での基本的視点について、いささかの所感を述べて締めくくりとしなければならぬだろう。

生き甲斐は精神のパンといわれる。味わうべき言葉である。たしかに、生き甲斐は精神的充実を醸し出すパン種であり、生きる活力への源泉といってよい。しかし、わたしはもう少し過激に、「生き甲斐は精神の火薬である」と述べたい。

ひとつには、人間的精神的な成長とは、惰性的な生き方を拒絶して、新しい経験を取り込みながら自己の古い殻を一枚一枚日常的に剥ぎ取っていくたゆみ

ない過程であって、必要ならば火を吹くように昨日の自己を炸裂させる激烈さを内に秘めたものであろう。ふたつには、断崖絶壁に身を置いて、自己の存在理由を問いただすといった修羅場をめぐり抜かないと、生き甲斐はとうも本物ではないような気がする。三つには、自己の人間的可能性を開花させ実現し、おのれの志を貫こうとするならば、自己を阻害し抑圧するさまざまな外的内的諸条件にたえず挑戦し、打ち破っていかなければならぬだろう。こうした事柄を統括的にイメージ化したものが生き甲斐火薬説にほかならない。現代の高度大衆消費社会はほとんど一切のものを商品化し、生き甲斐そのものさえも商品化し、あるいはアクセサリ化しかねない社会であるだけに、生き甲斐に火薬という危うい言葉を重ね合わせてみたい衝動に駆られるのだ。

日本でもよく知られているフランクフルト生まれのアメリカの精神分析学者エーリッヒ・フロムは人間存在のふたつの基本的様式として、「持つこと(所有)」「(“to have”)と「在ること(存在)」「(“to be”)」について語っている。かれは後者について、「人が何も持つことなく、何かを持つとと渴望することもなく、喜びにあふれ、自分の能力を生産的に使用し、世界と一になる存在様式である」(傍点原文)²⁴⁾と説明している。興味深いことに、フロムは「在る様式」の詩的表現の実例として、芭蕉の句「よく見ればなずな花咲く垣根かな」を引用している。芭蕉の言葉を借りるならば、「在る様式」の精髓とは、「造化にしたがい、造化にかえれ」ということになるだろう。

生き甲斐の問題はもちろん、「在る様式」と深くかかわっている。「持つ様式」ではなく、「在る様式」がわれわれの生活原理となると、生きる喜びが岩清水のようにこんこんと溢れ出てくるからである。フロムのいうように、「喜びはあ²⁵⁾ることに伴う輝きである」(傍点原文)とい²⁵⁾ってよいし、人びとは「在る様式」を会得することによって、「生の舞踏」に加わることができるのだろう。

こうしたフロムの見解について、(1)近代以降の産業主義を支えたふたつの心理学的前提、すなわち快樂主義と個人的利己主義への根底的批判があつて、この批判は明治期以降のわが国の近代化が経験した不幸と挫折にも当てはまるばかりでなく、戦後日本の高度経済成長が「持つ様式」の支配する社会の病理面を一層加速し増殖したこと、(2)近代社会の進歩思想や合理主義に汚染されてい

ない人間の精神に立ち返り省みることによって、産業主義の不幸と挫折を超克しようと試みており、この点も日本の近代化のなかで押し流され見失われた観がある日本文化の伝統に深く根ざした芭蕉的なものに、改めてわれわれの目を開かせ、生き甲斐の問題を根源的に考える重要な鍵となる点で、日本人の関心と思考を殊のほか触発し刺激するであろう。

いまひとつ着目したいのは、フロムが人間の「在る様式」を、「与え、分かち合い、犠牲を払う意志」として特徴づけていることである。²⁶⁾他者との一体化と連帯への人間欲求とあってよく、生き甲斐が一見個人的事象と見なされる場合でも、実は、他者との有形無形の生産的かかわりのなかで映発することを忘れてはならない。見田宗介にしたがえば、「われわれは人生の意味を、すなわち<生きがい>を、宇宙の虚無のただ中で、たがいに支え合っている」(傍点原文)という相互媒介的な構造のことだともいえる。²⁷⁾生き甲斐を自然や社会とのつながりのなかで、その生きた関係性のなかで、「生きる」とともに「生かされている」という二重構造を有するものとして認識する、ここに生き甲斐の原点があることを心に刻み込まなければならない。

〔参考文献〕

- 1) 秋山登代子「現代における生きがいの状況」『NHK放送文化研究年報』18号、NHK放送文化研究所、1973年、1—28頁。
- 2) 『朝日新聞』1971年1月1日付朝刊。
- 3) 後に、書物として刊行された。朝日新聞社科学部編『心のプリズム』朝日新聞社、1972年。
- 4) 『毎日新聞』1971年1月1日付朝刊。
- 5) 『自由新報』1971年2月2日付。田中義久『私生活主義批判—人間的自然の復権を求めて』筑摩書房、1974年、61頁より重引。
- 6) R・イングルハート、三宅一郎・金丸輝男・富沢克訳『静かなる革命—政治意識と行動様式の変化』東洋経済新報社、1978年。
- 7) 中野孝次『自分らしく生きる』講談社、1983年、132頁。
- 8) 『朝日新聞』1987年7月10日付夕刊。
- 9) 千葉敦子『よく死ぬことは、よく生きることだ』文藝春秋、1987年、7頁。
- 10) 井上俊『死がいの喪失』筑摩書房、1973年、18頁。
- 11) 神谷美恵子『生きがいについて』神谷美恵子著作集1、みすず書房、1980年、14頁。
- 12) 濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞典』有斐閣、1982年、増補版、8頁。
- 13) 神谷美恵子、前掲書、15頁。
- 14) 見田宗介『現代の生きがい—変わる日本人の人生観』日本経済新聞社、1970年。
- 15) 「現代の生きがいに関する世論調査—結果の概要」NHK放送世論調査所、1972年、1頁。
- 16) 「私生活主義」については、田中義久『私生活主義批判—人間的自然の復権を求めて』筑摩書房、1974年を、「プライベートイゼーション」については、宮島喬『現代社会意識論』日本評論社、1983年を、「『滅私奉公』から『滅公奉私』へ』については、日高六郎『戦後思想を考える』岩波書店、1980年を参照せよ。
- 17) 田中義久、前掲書、89頁。
- 18) 日高六郎、前掲書、86頁。
- 19) 山田洸「近代日本思想史上における公と私」『思想と現代』11号（1987年）、白石書店、63頁。
- 20) 山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』中央公論社、1984年、61頁。
- 21) 朝日新聞社の最近の全国世論調査（1987年12月実施）の結果によると、「あなたは、いま、幸せだと思いますか。そうは思いませんか」という質問に対して、「幸せ」78%、「そうは思わない」12%、「その他・答えない」10%となっている。その質的次元はともかくとして、日本人の主観的な幸福感は相当に高いように思われる。「定期国民意識調査」『朝日新聞』1988年1月1日付朝刊。
- 22) 宮島喬、前掲書、193頁。
- 23) 同書、200頁。

- 24) エーリッヒ・フロム、佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊國屋書店、1977年、39頁。
- 25) 同書、162頁。
- 26) 同書、141—150頁。
- 27) 見田宗介、前掲書、198頁。

(付記) 本稿は成城大学第12回公開講座「いきがいII」における講義(1987年10月17日)の草稿に加筆したものである。